

## - 1 生のまち

まちづくり構想などで最近よく用いられる「元気」とはそもそも何だろうか。

### - 1 - 1 動物がイキイキ 北海道旭川市（旭山動物園）

2004年9月、旭山動物園は4月から半年足らずの間に入園者数が100万人の大台を突破した。そして2004年度145万人、2005年度207万人、2006年度304万人と著しい増加を続け、2007年度は6月までの3ヶ月間で既に72万人を超えた。前年度同期比で18.6パーセントもの増加である。

旭山動物園は1967年7月に開園したが、1967年度の入園者数は46万人であり、ピーク時の1983年度ですら60万人であった。その後は減少傾向に転じ、1996年度は最低の26万人を記録して一時は閉鎖も考えられたというから、今日の旭山動物園はまさに「再生」を、いやそれ以上の「新生」を成し遂げたとと言える。そしてその「新生」は突如もたらされたものではなく、現場の地道な取り組みによりもたらされたものである(入園者数は1997年度31万人、2000年度54万人、2003年度82万人と

1990年代後半から回復に転じていた)。

その旭山動物園では、動物が生き生きしていると言われる。例えば大人気の「ほっきょくぐま館」では、デジタルカメラの手振れ防止機能がまるで功を奏さないほどのすごい迫力を体験するはずである。「ペンギん館」では、写真の枠にどうやっても納まらないほどのペンギンの素早さを実感するに違いない。旭山動物園が大勢の観光客を集める理由はまさにここにあると言える。そのような状況は一体何によってもたらされたのであろうか。経営的な要因としては、巧みな宣伝、プロモーションということがある。しかし、当たり前だが、その背景には宣伝するに足るだけの優れた内容がある。そしてその内容とは、珍しい動物の存在ではなく、「行動展示」などの動物の「見せ方」であることはよく知られている。

その紹介のされ方をいくつかの雑誌から拾



ブレる白くま 2006年7月撮影(以下同じ)



枠から出てしまうペンギン

ってみると、「動物たちの自然な生態が見られる」、「動物の自然な行動や生活を間近で見ることができる」、「小さな園だが、興奮の密度は追従を許さず」などとなっている。要するに「行動展示」とは静止しているカタチではなく動いているカタチを見せるものであり、視点を空間から時間へとシフトさせものであると解釈できるが、まずはこのような視点の転換が今後のまちづくりや都市経営にとっても本質的に重要であることを感じることができる。屋内にいるペンギンと屋外にいるペンギンとではどこが違うかをじっくり観察することも、今後のまちづくりにとって有益であるように思われる。

ここで重要なのは、「行動展示」が何によって実現したかということである。それは、動物園の空間をどう設計したらいいかを考える設計者、計画者の視点によってもたらされたものではないであろう。旭山動物園では外部の設計者やコンサルタントに依存せず、現場の職員がアイデア出しからその具体化までを担ってい

るという。

旭山動物園では、苦しい当時は、「旭川市の予算のお荷物だ」、「日本最北の動物園に人が来るわけない」などという否定的な考えが広がったという。そして、そのような考えをくつがえして新生をもたらした力は、目先の実利を追う実務からではなく、動物に真摯に向き合う損得抜きの現場の研究からもたらされたと言われる。貧すれば鈍するとはよく言われることであるが、苦しいときこそ実利を超えた視野の広い考えを持つことが大切である、という今後のまちづくりにおいて本質的に重要なことを旭山動物園は教えてくれるように思われる。旭山動物園の園長は「伝えたいのは「命」と語っているが、それは既に人々に伝わり始めているようである。「生き生きとした動物たちの姿に、なぜか元気がわいてくる」、「経済効果だけでなく、市民の意識も変わりました」という声が聞かれるようになってきているという。



内のペンギン



外のペンギン

## - 1 - 2 人間もゲンキ 大分県豊後高田市

「昭和 30 年代」がしばらく前からブームである。昔を懐かしむ老人の郷愁などという単純な理由でそのブームを説明することはできない。例えば「昭和のまち」のテーマパークとして名高い新横浜のラーメン博物館や東京の台場一丁目商店街、ナンジャタウンなどに行ってみれば、若い人たちが来場者のかなりの部分を占めていることに気づく。そして、彼らはそこで実にイキイキと時間を楽しんでいるように見える。ビルの中の閉ざされた狭いテーマパークでありながら、外部の広大なテーマパークで見られる笑顔とは別種の笑顔がそこにはある、とも感じる。それはどこからもたらされるのであろうか。

「昭和 30 年代」は「貧しくても元気だった」などとよく形容されるが、それは即ち現代は豊かでも元気ではないということである。豊かになる方向を間違えたということかもしれない。どう間違えたのか。あるいは、どう間違えつつあるのか。それを知るために「昭和 30 年代」があるように思われる。

このような趣旨で、ここで豊後高田市の取り組みを取り上げるわけである。豊後高田市は「昭和の町」を成功させたまちとして既に全国的に有名になっている。人口約 1 万 8 千人のまちに、今では年間 20 万人以上の観光客が訪れているという。もちろん豊後高田市に派手なテーマパークがあるわけではない。まちなみはかなり普通である。そのためあまり評価せずに帰ってしまう人もいるようであるが、評価しない人が少しはいるというのもまた場合によっては大切なことではないかと思われる（評価されない原因としては、「昭和の町」がいまだ事業途上でまちなみも継続して整備中という事情もあるのであろうが）。評価する人の中には感動のレベルで評価する人がいるらしいので、「昭和の町」を物理的な面だけで論評することはできない。感動の源は果たしてどこにあるのであろうか。それが見えないということは、今欠けているものが見えないということでもあろうから、それでまちづくりをすることは難しいかもしれない。



「昭和の町」のゲート 2006 年 2 月撮影  
(以下同じ)



中央通りのまちなみ

豊後高田市は鉄道の廃止などもあり昭和 40 年代以降衰退傾向を強め、近年では郊外型大型店の出店なども加わって中心部ではシャッターが目立つようになってきた。一時は人よりも犬や猫の行き来の方が多いなどと言われたらしいが、この状況を一変させたのが 2001 年に開始された「昭和の町」事業である。その背景には商工会議所策定の「豊後高田地域商業活性化計画」(1992 年度)、「豊後高田中心市街地ストーリー」(1997 年度、ここで地域資源「昭和」を発見)など息の長い取り組みがあった。1999 年には地元有志により「既存商店街再生研究会」が発足して議論がひらめきのように「昭和の町」に発展し、2000 年度に実施した「商店街まちなみ実態調査」により昭和 30 年代以前に建てられた建物が 7 割以上残っていることが判明した。それらの多くは看板の背後に隠れるように存在していた。

そこで 2001 年度から街並み修景事業が開始されて、建物のファサードが以前の状態に修復されることとなった(パラペットの除去、窓枠

などのアルミのものから木製のものへの取替え、看板の木製・ブリキ製への取替え等)。また、2002 年には核施設として古い米蔵を活用した「昭和ロマン蔵」が開館され、以後「駄菓子屋の夢博物館」「昭和の絵本美術館」などの施設が整備されてきている。2006 年にはレストラン「旬彩南蔵」(米蔵活用)もオープンした。参加店舗数は当初は 7 店舗であったが、2002 年に一挙に 10 店舗が新たに参加し、現在では 4 商店街(豊後高田市の 8 商店街の半分)の約 40 店舗が参加している。これら「昭和の店」は、「昭和の建築再生」、「昭和の歴史再生」(「一店一宝」の展示)、「昭和の商品再生」(「一店一品」の販売)、「昭和の商人再生」から成る。「昭和の商人」とは、「お客様と目と目を交わし、心と心を交わす」商人である。一方、地元住民が案内してくれる「ご案内人制度」がある。そして、この人と町との関係に何か重要なものがあるようにも思われる(「昭和の町」のサブタイトルは「お帰りなさい、思い出の町へ」である)。



「肉のかなおか」の一宝「肉きり機」



昭和の店のひとつ「古美屋」  
一品は「復刻！力道山のヒコーキとばし」

### - 1 - 3 おばあちゃんもハツラツ 東京都豊島区巣鴨地蔵通商店街

東京都豊島区に「巣鴨地蔵通商店街」がある。「とげぬき地蔵商店街」として全国的に有名であり、高岩寺(とげぬき地蔵が本尊)の縁日(毎月4の付く日の3日)には遠方からも高齢者がお参りにやってくる。その巣鴨地蔵通商店街は随分以前から「おばあちゃんの原宿」と言われている。言われてみれば、原宿の竹下通りとの共通点は多い。以下にいくつか挙げてみる。

まちなみが揃っていない。比較的雑然としている。(建物のデザイン、高さなどはバラバラである)

周囲に聖なる場所がある。(寺社等)

安くて美味しい食べ物があり、食べ歩きができる。(巣鴨は塩大福など、原宿はクレープなど)

座るところがたくさんある。(巣鴨には通りや境内にたくさんのベンチがあり、原宿には店の入口に「座るな」という張り紙があるので即ち地べたに座ってしまう)

トイレがたくさんある。(巣鴨には多くの

店舗がトイレを提供、原宿には店に「ここにはトイレはありません」という張り紙があるので即ちどこかでしてしまう)

安いものが売られている。(巣鴨は赤パン等の激安下着、原宿は若い女性向けの激安下着)

体に健康によさそうなものを売っている。(巣鴨は薬、原宿は化粧品)

同じような境涯の人がたくさんいるように見える。

これだけ共通点があるとは実に驚きであるが、何となく塩大福の皮だけかじっているような感じもする。

ところで、高岩寺の境内には「洗い観音」がある。縁日には観音様を布で洗う順番を待つのに長蛇の列ができる。洗い観音をとげ抜き地蔵と勘違いしている人もいるらしいが、それはともかくとして、ここで感心してしまうのは、誰もが順番争いなどしないでじっと待ち、順番が



巣鴨地蔵通商店街の入口

2007年4月撮影(以下同じ)



赤パン

来れば観音様が磨り減るほど一生懸命に洗うということである。これは一言で言えば、競争することではなく参加することに意義がある、という事態である。そして、皆が大切に思うものを自分も大切に思う。これは、来るべきグローバル化の姿である。

どうして地蔵通商店街に来るべきグローバル化のカタチができてしまうのか。地蔵通商店街の発展は「共存共栄」という言葉で説明されることが多いが、それが関係あるのかもしれない。商店街の真ん中にこれだけ露天商が出て摩擦が生じないというのは大変珍しいように思われる（なお、4の日以外も人通りが増えてきたのでこの関係には変化の兆しが出てくる可能性があるとの指摘はある）。近くの巣鴨信用金庫が無料で「おもてなし処」を設けてお茶菓子などをサービスしているのも珍しい。地下鉄巣鴨駅では「いこいの広場」として椅子とテーブルとを用意し、無料の給茶機まで設置している。地下鉄の他の駅では見たことがない。

昨今では「おもてなし」をまちおこしの重要な要素とするところが増えてきたようだが、巣鴨のようなところは全国でも珍しいであろう。これだけまちの人々にサービスされれば、ほとんどの人は心が和らぎ、心が和らげば会話がはずみ、会話がはずめば一人暮らしのお年寄りでも元気になり、元気になれば手足も口も動き、経済も自然に回る。

市場経済原理とは異次元の互酬の精神、思いやりの精神が市場経済をも回すのであれば、人々がお互いの心を洗いあい、とげを抜きあうことでまちが経済的にも元気になるということはありそうである。もしそうであるならば、これほど優れた「経済政策」「福祉政策」もないであろう。



高岩寺の洗い観音



巣鴨信用金庫の「おもてなし処」

## - 2 輪のまち

「元気」の大きさは統計で計測できる経済活動の大きさとは必ずしも連動しない。経済効率を上げれば人々が元気になるなどとは全く言えない。東京のまん中に業務機能を詰め込んで経済効率を上げれば国民は「豊か」になる、という過去の言説の真偽は「豊か」の定義次第だが、「元気」はそれとは別次元の問題である。このところ東京の足元の変貌が著しいが、その背景にはそういうことがわかってきたという事情もあるように思われる。そこで以下では日本経済の最先端を担うと今はまだ言えそうな東京のまん中の実態を見ることとしたい。

### - 2 - 1 開かれたまち 東京都千代田区（大手町・丸の内・有楽町）

丸の内などと言え、日本経済を支えるべく日夜人々が活動している場というイメージが昔はあった。そして、その実態はともかく、その風景はカラー写真も白黒写真に見えてしまうようなものであった。真夏に会社訪問する学生が行き場もなく往生する場所でもあった。

昨今の大手町・丸の内・有楽町は様相を一変させてしまった。例えば同地区の中心道路である仲通りでは石畳化と植栽の工事が2007年秋までの予定で進んでおり、すでにかかなりの部分がとても「お洒落」に変貌している。このような変化は同地区の関係機関が一体となって進めているまちづくりの一環である。

1996年に「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会」（行政、企業等から成る）が発足し、「まちづくりガイドライン2005」を策定した。そのガイドラインは「ABLE CITY 新しい可能性と出会える街」をキャッチフレーズに掲げている。A=Amenity（快適）、B=Business（ビジネス）、L=Life（生活、活力）、E=Environment（環境）であるから、田舎の小さなまちが掲げてもおかしくなさそうな目標である。東京のまん中のまちづくりは今そういうことになっている。

ガイドラインが掲げている具体的な目標は、時代をリードする国際的なビジネスのまち、



石畳化が進む丸の内 2007年2月撮影



完成した植栽 2007年3月撮影（以下同じ）

人々が集まり賑わいのあるまち、 情報化時代に対応した情報交流・発信のまち、 風格と活力が調和するまち、 便利で快適に歩けるまち、 環境と共生するまち、 安心・安全なまち、 地域、行政、来街者が協力して育てるまち、の8つである。 を除けば、日本全国のどのまちの目標になってもおかしくない内容である。これらの評価に関しては意見が分かれるかもしれないが、全国のまちがミニ東京を目指すかつてのまちづくりは無意味になった。ガイドラインでは「CBD から ABC へと機能更新を進める」となっているので、「中心」に大きな変化が生じていると言えるであろう（CBD=Central Business District 中心業務地区、ABC=Amenity Business Core 多様で魅力的な諸機能を備えたアメニティ豊かな業務地区）。

ガイドラインが基本的理念のひとつとして「開かれたまちづくり」を掲げているのは印象的である。それによれば、「まちづくりの推進にあたっては、市民、就業者、来街者、まちづ

くりの専門家等に、その内容を公開して理解を得ながら」進めるとなっている。日本経済の最中心部の開発が、関係事業者や行政だけではなく広く市民、就業者、来街者等まで含めて理解を得るという前提で進められるというのは、一昔前の感覚からすればまことに革新的である。

最近の同地区のデザインは、「開かれた」方向を強く志向しているようである。例えば、道路レベルまでのガラスのカーテンウォールの透過性を生かし、壁の内外に同じ花壇を配置して建物内外のつながりを演出したり、同じ種類の花を地区全体で統一的に植えて地区のつながりを演出したりしている。

以上のような変化は、業務機能の効率性向上や不動産価値の上昇などという実利的な面だけでは語れないように思われる。事業である以上もちろんこれらは大きな関心事ではあろうが、都市再生やまちづくりの視野はすでにそのような範囲を超えている。



花でビルの内外をつなぐ試み



同じ種類の花（チューリップ）で地区をつなぐ試み



## - 2 - 2 きめ細かなまち 東京都中央区（晴海トリトンスクエア）

晴海の埋立地でひととき目立つのが晴海トリトンスクエアの3棟の超高層ビルである。それらは「トリ (Tri-) = 3」を目に見えるカタチで表現しているが、その近代的な表情からはなかなか想像できない有機的なまちなみその足元に広がっている。トリトンスクエアは「職・遊・住」の3つの美しい調和をまちづくりのテーマとしており、それが「トリ」のもうひとつの意味なのであるが、それが足元では具現化されている。

晴海トリトンスクエアは市街地再開発事業により2001年4月に誕生した新しいまちである。まちの管理運営は地権者法人が共同出資した「株晴海コーポレーション」が担っている。同社は地権者と協議しつつ質の高い環境整備をめざしているが、また、周囲地域の人々との交流の促進も図っている。イベントなどでは、「自然との共生」と「地域の共生」とをテーマに掲げている。

同社は2007年4月に誕生7年目を迎えた晴海トリトンスクエアを「4月から中学生になり

ました」と表現している。また、「一層、社会的自覚を持ち、地域社会に少しでも貢献したい」とまちづくりの姿勢を示している。そしてその目指す姿を「多くの人達から愛される“クリーン、クール、チャーミング(3C)”な街」とし、「これからも切磋琢磨していきます」と述べている。

晴海トリトンスクエアでは、以上のように、機能優先の近代がともすれば視野の外に置いてきた「人格」「風格」を重視している。そして実際に晴海トリトンスクエアを訪れて見れば、その風格をまちの至るところで見出すことができる。そこでは超高層ビルの無機質性を包み込むような柔らかなまちなみが形成されている。例えば道路との間の壁は鉄、コンクリートなどの近代建築材料を用いたものではなく、細かな石を手で積み上げたようなものになっている。このようなきめ細かな部分こそが、時間の経過とともに人々のまちへの愛着を深める大切な資産になっていくものと思われる。

晴海トリトンスクエアでは、まちのアイデン



勝どき側から「トリトンスクエア」を望む  
2007年2月撮影（以下同じ）



人の手による時間の積み重ねを感じさせる  
エクステリア

ティティとなるトリトン像や、ゆるやかな曲線を描く心地よい道・手すり、細かく分節されて人間的な大きさを感じさせる低層棟、低層棟に囲まれてぬくもりを感じさせる中庭、いたるところに整備された豊かな植栽など、まちの風格が様々なカタチで表現されている。

一方、機能面では、歩行者と自動車との分離が徹底しており、通行の安全性がしっかりと確保されている。地区内の住宅に住む子供たちは、この安全な道を通って学校へ通い、また、公園や広場に遊びに行くことができる。

地区内には晴海区民館のほかクラシック専門のホールやグランドロビーなどがあり、地区住民に限らず広く地域の人々が交流できる場が形成されている。グランドロビーでは地域の行事を撮影した写真展や地域の人々の手になる絵画展などが随時開催されており、多くの人々が訪れている。

まちづくりの手法で他の地区ではあまり見られないものとして興味深いのは、絵本の発行である。これはイラストレーターの藤岡牧夫氏

の作になる『イルカのトリトン』という絵本であり、「(株)晴海コーポレーション」が発行している。子供たちがイルカのトリトンとともに晴海トリトンスクエアから様々な場所へ冒険にでかけるというストーリーになっているが、絵本の中にトリトンスクエアの風景がいくつも描かれているので、多くの人にまちに愛着を持ってもらい、まちづくりに関心を持ってもらう上でこの絵本はとても大きな効果を持っているように思われる。2007年3月までに3作目の『イルカのトリトン 魚のオジイサン元気になあれ!』まで発行されており、藤岡氏はシリーズを今後も続ける意欲を示している。この取り組みは、まちとともに歴史を積み重ね成長する絵本という大変興味深いものになっている。地域の子供たちに無料で配布しているほか、希望者にも有料で販売しているようである。

以上のように、晴海トリトンスクエアは、まちを知るためには細部が重要であることを改めて感じさせてくれる。



多様な植物から成る豊かな植栽



歩車分離の徹底でくつろいで歩ける空間の実現  
写真は「ふれあい橋」

### - 2 - 3 生きたまち 東京都港区（汐留シオサイト）

虎ノ門の交差点から東京湾方向を眺めるとほぼ正面に超高層ビル群が見える。「汐留シオサイト」である。景観や都市気候の観点からは様々な議論がある同地区ではあるが、そのまちづくり、空間づくりの優れた手法は多くのまちの参考になるものと思われる。

「汐留シオサイト」は旧汐留貨物駅跡地を中心とする広大な土地の再開発で生まれたまちである。2002年7月以降順次ビルが竣工してきているが、地区の管理運営は地権者が「汐留地区街づくり協議会」を設立して一体的に行っている。その協議会は「タイダルパーク」(干満のある波打ち際を大切に作る公園のようなまち)というコンセプトを提示したが、ここに同地区のまちづくりの大切な視点があると言える。波打ち際を意識するという事は即ち生態系を意識するという事であり、自然との共生に配慮するという事である。その思いは「シオサイト」という地球や生命を思わせる地区の名称や、地球や波をデザインしたロゴマークにも表れている。

そのようなコンセプトを持つ「汐留シオサイト」は、植栽がとても豊かである。それは通常の街路樹整備では実現できない高いレベルのものを地区の住民(企業)の負担により実現しているものである。その植栽のみごとなさは場所ごとに様々な表情を見せる風景で実感することができる(植物の種類を極めて巧みに使い分けている)。

「汐留シオサイト」では公共施設全体のグレードアップが図られているが、それは委託費として東京都から受け取る行政負担分と住民(企業)の負担分とを合わせて一体的に管理運営する「有限責任中間法人汐留シオサイト・タウンマネジメント」(地元企業20社が拠出)の活動により実現されている。そのような仕組みで一体管理されている「汐留シオサイト」の空間は立体的で極めて質の高いものになっている。

「汐留シオサイト」には他の地区とは風景が異なる「汐留西地区(シオサイト5区)」がある。そこには他地区と異なり生業を営む多くの人が再開発前から存在していた。また、大商業



「汐留シオサイト」の植栽  
2007年3月撮影(以下同じ)



空間を立体的に設計

地に挟まれた同地区の再開発にあたっては他地区とは異なる独自のコンセプトが求められた。そのため地元住民が「汐留地区対策協議会」を組織して議論を重ねた結果、アイデアとして出てきたのが「イタリアの街」であった。そして、イタリア視察、イタリア政府関係者との議論等を重ねた結果、イタリアの表面的なカタチをまねるのではなく、文化まで含めてイタリアのまちづくりに学ぶという方向になった。そういう方向になった背景には、テーマパークではない本物のまちをつくりたいという住民の思いがあった。

イタリアのまちには人と人との関係を大切にして生業をする文化が今でも根付いていると言われる。その文化はかつて日本のまちの文化でもあった。ここに東京のまん中のまちがイタリアのまちと共振する素地があった。そして、イタリアのまちに学びつつ具体的にまちを運営する組織として 2004 年に「特定非営利活動法人コムーネ汐留」が設立された。これは協議会という地縁組織が法人化されたものである

が、イタリアをコンセプトにするということもあり、新たに入るテナント等も会員として受け入れる外に開かれた組織となった。「コムーネ汐留」の基本的な役割は地区の一体的管理運営であるが、その内容はまちなみの整備からテナントの導入まで多岐にわたっている。

「コムーネ汐留」を軸に様々な調整が行われた結果、同地区ではレベルの高い美しい街並みが実現した。テナントも同地区のコンセプトにふさわしい業種のもので順次入居してきている。コムーネ汐留はイタリアの商工会議所のメンバーになっているほか、ミラノ・ドムス・アカデミーとの共同研究も行っており、これからもまちづくりの本質をよく見つめた奥の深いまちづくりが展開されていくことが期待されている。なお、同地区にはまちの記憶（機関車用転車台）も残されている。



「汐留シオサイト5区」



広場のサークル

### - 3 悠のまち

東京の大手町・丸の内・有楽町地区では道路に面した1階部分をオフィスではなく店舗にすることを推進している。これは一種の下駄履きオフィスとでも言うべきものであるが、それによりまちに賑わいをもたらし行き交う人々を増やそうというわけである。そして実際に同地区では道路にテーブルとイスを出すカフェなども増えてきた。人々がリラックスできる空間が増えるとともに芸術活動も盛んになり、同地区は経済面のみならず文化面でもホットな地区になってきた。ところで、下駄、リラックス、ホットで連想されるまちと言えば、どのようなところであろうか。

#### - 3 - 1 囲い込みから交流へ 大分県別府市

温泉地の繁栄は企業等の組織の繁栄とともにあった。組織の集団力、結束力が経済成長の原動力であった時代、それを高めるために温泉旅行がよく催された。温泉地では温泉、宴会、舞台鑑賞、土産物購入などがセットとして提供された。組織の人達はその目的からして温泉地でも身内だけで固まり、個人としてではなく集団として楽しんだ。そのため三々五々街歩きをするようなこともあまりなく、旅行の目的はひとつの建物の内部だけで完結してしまった。職場の生態系がそのまま温泉地の生態系になった。この生態系に適合すべく、旅館経営者は建物を巨大化して様々な機能をその中に詰め込

み、旅行者を囲い込むようになった。

以上のような傾向は経済における集団力の低下とともに行き詰った。組織では組織のしがらみにとらわれない個人が求められるようになってきた。その生態系の変化が温泉地にも波及した。「竹瓦温泉」、「海門寺温泉」、「鉄輪温泉」など「別府八湯」と呼ばれる温泉を持ち1970年頃までは団体客で賑わった別府市も、その後は観光形態の激変により衰退に向かうこととなった。

温泉地衰退の大きな原因は、それぞれの組織が内（建物内）への関心を強め、まちへの関心を小さくしていったところにある。そのため、



「竹瓦温泉」と地域通過「泉都」の幟

2006年2月撮影（以下同じ）



「海門寺温泉」

集団の時代が終わり個人の時代になると途端に対応できなくなってしまった。したがって、その反省は、まちを見直す方向へと必然的に向かう。別府市でその契機となったのは、市内の歴史的建築物の再発見であった。1993年に観光産業経営研究会が『別府近代建築史、地霊ゲニウス・ロキ』で近代建築を紹介し、1998年に「別府温泉八湯地域づくりフォーラム」が歴史的木造建築物を活かしたまちづくりを提案した。これらを受けて1998年に竹瓦温泉地区で「別府八湯竹瓦倶楽部」が結成され、竹瓦温泉横丁の整備などが提言されるとともに、街並みを巡るウォーキングツアーが開始された。ツアーは当初は地元の人中心であったが、次第に大勢の観光客が集まるようになった。そしてその活動が他地区にも波及し、今では各地区でツアーが開催されるようになっている（それらを総称して「別府八湯ウオーク」と呼んでいる）。

観光客にまちの中に出てもらったり、様々な人と交流してもらったりするためのその他の工夫として、「別府八湯路地裏文化祭」、「ゆか

た de ピンポン大会」、「別府八湯温泉道」、「別府八湯温泉泊覧会」(ハットウ・オンパク)などが竹瓦倶楽部等の主催により実施されてきている。一方、市は人々のまちづくり活動等を支援するために、地域通貨「泉都(セント)」の発行や「泉都別府まちづくり支援事業」などを行ってきている。

ハード整備に関しては、別府駅周辺でモニユメントの整備や竹瓦温泉の改修などが行われてきている。鉄輪温泉地区でも道路の石畳化などが行われてきている。後者の事業においては、地域に暮らす人々が中心になって議論し、まち全体を視野に入れて地域の特性を活かす計画が策定された。その計画では、まちをゆったりと安心して散策できるようにすることなどが目標とされている。



「竹瓦小路」



別府駅前のモニユメント

### - 3 - 2 振り向けば花 静岡県熱海市

JR 熱海駅の駅前広場は、賑わいのある明るい空間である。そこには間歇泉(かんけつせん)が3分ごとに噴出す足湯「家康の湯」があり、その横に機関車がある(明治から大正まで熱海・小田原間を走っていたもの)。それらの前には美しい花壇もある(2010年を目途に進められている「花の都 熱海」実施計画の一環として整備されたものと思われる)。その周辺のベンチには高齢者ばかりでなく若い女性や男性のグループも結構座っている。熱海は実はなかなか元気なまちなのではないか、という印象を持つ。

しかし、実際には別府同様、熱海でも宿泊客は1970年頃をピークにほぼ一貫して減少してきている。バブル崩壊後はホテルの倒産もあり、海岸沿いの土地や丘の上の土地に廃墟のような建物も見られるようになった。そしてその近くでは高層マンションの建設が進められている。温泉地の景観が破壊されるとの危機意識も持たれるようになってきた。これらの問題が顕在化してきた背景には、他の多くの温泉地と同

様、開発を敷地単位、建物単位で考えてしまう、いわば内向きの姿勢があったと言える。市民から市に寄せられた意見の中にも、「ホテル・旅館がお客を囲い込んでいるのが問題」との指摘が出てきている。

こうした中、2006年9月に初当選した斉藤新市長が同年12月に「熱海市財政危機宣言」を出し、市内は騒然となった、と報道された。財政破綻を避けるためには早い段階で危機意識を持つことが重要である、との市長の思いから発した「宣言」であったようだが、財政支出が大幅に削減されるという後ろ向きの部分のみに大きな関心を持つ関係者も多かったらしい。実際には、財政支出の見直しとともに、観光振興策の抜本的見直しという積極策が検討されることとなり、2007年4月に市長直轄の「観光戦略室」が設置された。同時に、市長を座長とする「観光戦略会議」が設置された。そして熱海市の新たな発展のための抜本的な議論が展開されることとなった。

熱海市観光戦略会議は2007年10月下旬を目



駅前足湯「家康の湯」と機関車  
2007年4月撮影(以下同じ)



駅前の花壇

処に「熱海市観光基本計画」を策定する予定で議論を行っているが、同計画の現在の案は「熱海の目指すべき姿」を「来るたび再発見、進化するリゾート都市・熱海」としている。そして、「熱海の魅力づくり（観光資源の開発）」として、まちづくりによる観光資源の創出（景観形成、誰にもやさしい観光地づくり、歩いて楽しいまちづくり等）、温泉を核にしたまちづくり（湯けむりの演出、外湯施設の整備、温泉と健康の連携）、歴史・文化を活かした観光（歴史・文化の魅力の再評価、文化芸術による市内活性化、文化施設による集客、地域伝統芸能の活用）等を掲げている。

ところで、現在の観光のポイントは「歩く」にある。市の「熱海新発見ガイドブック」は最初のページが「温泉散歩」であり、次のページが「文学・歴史散歩」であり、さらに次のページも「湯のまち散歩」である（その後によく「湯～遊～バス」が掲載されている）。実際、熱海のまちには時間をかけて歩いても全く飽きないほどの数多くの資産がある。温泉では

「河原湯」、「佐治郎の湯」等の「熱海七湯」、建築ではブルーノ・タウトが設計した「旧日向邸」、熱海の三大別荘と称された「起雲閣」等、水辺の風景では「ムーンテラス」、「アザミザクラ並木」（糸川）等、イベントではサンビーチのライトアップ、海上花火大会等がある。

また、ガイドブックには掲載されていない魅力ある「資産」もたくさんある。例えば旧日向邸のある東の小高い丘の上の小径をたどれば、鬱蒼とした木々に包まれる。そして突然目の前が開けて海が見える。西のまちを散策して道に迷えば、地元の人がとても親切に道案内をしてくれる。まちの説明などもしてくれる。商店街では花を飾りベンチを出して観光客をもてなしてくれる。このような、なかなか文字にはならないところに、実は本当のまちの魅力が隠されているようにも思われる。これらの「資産」を有機的に結びつけ、まち全体として美しい風景をつくることは大きな課題であるが、それは大きな視野の下で小さなものを大切にする心が生み出すものであろう。



アザミザクラ並木（糸川）



駅前の平和通り名店街



### - 3 - 3 種に乗って未来の花へ 熊本県小国町（杖立温泉）

杖立温泉は熊本県小国町北西部にある、筑後川（通称：杖立川）両岸に開かれた山間の温泉地である。小国町の「ゆうステーション」からは路線バスで 20 分弱で着く。同町の隣の南小国町にある黒川温泉（ゆうステーションから路線バスで南東方向に 30 分強）はまちづくりの成功事例として名高いが（2007 年夏には「入湯手形」200 万枚を達成）、杖立温泉も様々な取り組みを行っている。

杖立温泉は 1700 年の歴史があると言われるが（応仁天皇の産湯にもなったという）「杖立」の名前は弘法大師がここで竹の杖を立てたことに由来するという。温泉の効能の高さから、その杖から枝葉が生えてきたという言い伝えがあり、杖をついて湯治にやってきた人も帰りには杖を立てかけたまま忘れて帰ってしまったともいう。そのような歴史ある温泉地だけに寺社も多く、温泉地本来の雰囲気がよく残されている。

杖立温泉も他の温泉地同様、観光形態の変化や長期不況により衰退傾向を強めてきた。この

傾向を変えるべく、様々な取り組みが行われてきている。1996 年には斜張橋である杖立橋と一体となった「P ホール」が完成した。集会室でもあり喫茶・ギャラリーでもある「P ホール」は、地元の人々の集いの場、観光客と地元の人々との交流の場となっている。

杖立温泉旅館組合は 1999 年から「杖立温泉の新しいチャレンジ」として「食・体・温の健康の里」をテーマにまちづくりに取り組んできている。食は薬膳、体は気功、温は温泉を意味する。具体的には、食＝地元産の有機野菜や中国漢方生薬を使った薬膳料理、体＝「少林寺」に伝わる気功体操（「少林武術気功健康コース」を随時開催）、温＝1700 年の歴史ある杖立の湯（「古代伝承むし湯」）である。小国町は中国河南省登封市と友好都市提携を結んでおり、同市の少林寺健康法と温泉の効能とが杖立で融合している。

「健康」を基本に据えたまちづくりの熱気は、各所に設置された「むし場」で実感できる。これは温泉の蒸気を利用した「自然の台所」であ



杖立温泉の風景 2006 年 2 月撮影（以下同じ）



杖立温泉の案内板

る。弘法大師が詠んだとされる句も掲げられている。最近では「背戸屋（せどや）」（杖立では狭い路地をこう呼ぶ）を散策する人も増えているようである。杖立温泉観光協会では歩く人の便宜のために「みちくさマップ」を作成し、2007年4月に「みちくさ案内人会」を発足させている。これは地元の人によるボランティア・ガイドであり、料金500円で蒸し玉子とタオルが付く。

杖立ではイベントにも力が入れられており、4月から5月にかけては「日本一の鯉のぼり祭り」（3500匹がゆらめく）、5月には「温泉祭」（踊り、神事、杖立伝承芝居等）、8月には「七夕祭り」（300個以上の灯明が杖立川沿いを彩り、住民手づくりの料理等が楽しめる）が開催される。

最近の興味深い取り組みに、杖立温泉有志が組織した「朝顔プロジェクトX」がある。これは町中に朝顔をあふれさせるというプロジェクトであるが、アーティスト・日比野克彦氏が進める「明後日朝顔プロジェクト」と連携する

こととなった。日比野氏のプロジェクトのねらいは、人と人・人と地域・地域と地域のコミュニケーションを促し現代社会に於ける人と地域の関係を検証すること、人と人との関係性の中から創造されてくるカタチを芸術の根本と捉え社会の中における芸術の機能性・多様性を試みること、という点にある。

日比野氏は「明後日朝顔」の基本理念を「一粒の種の中には今までの無数の記憶が蓄積されている」「一粒の種の中には次に伝えるたくさんの思い出が詰まっている」とした上で「記憶と思い出が今日を過ごして花を咲かせると、明日の種が生まれてくる。種の船に乗れば明日の明日へと繋がっていく。そして・・・明後日の姿へと想いは広がる」と表現している。日比野氏のこの基本理念と杖立温泉の取り組みとが共振し、2007年8月には杖立で同氏を招いてトークイベントが開催されることになっている（主催：杖立温泉観光協会）。



むし場



弘法大師の句

#### - 4 歩のまち

「歩く」はまちづくりの基本になりつつある。自動車社会アメリカですら今や「歩く」を前提にしたまちづくりが主流になっているという。日本でもこれからますます「歩いて暮らせるまち」をつくるのが大きな課題になっていくものと思われる。

##### - 4 - 1 ぶらりと歩けるまち 長野県下諏訪町

下諏訪町は古くから諏訪大社の門前町として、また、中山道と甲州道中の合流する温泉宿場町として栄えてきた。産業面では戦前は製糸業で栄えたが、戦後は「東洋のスイス」と呼ばれ、時計、カメラ、オルゴールなどを中心とする精密機械工業のまちとして発展してきた。最近では電子機器関連産業の担い手ともなっている。下諏訪町における精密機械工業の発展には諏訪地方の清浄な空気や水がおおいに寄与している。したがって、それらを守りつつ経済社会を発展させることが下諏訪町のまちづくりの基本になる。この点は同町のホームページに「先人が作り上げてきた町の長い歴史を重んじながら時代の流れを見極め、美しい自然と豊かな人間性を誇りとしながら、誰でもが住みたくなくなる明るく安らぎのあるまちづくりを町民

力をあわせて推進」していくと示されている。

下諏訪町におけるまちづくりの取り組みとして特徴的なのは、町民主体の組織である「下諏訪町はってん 100 人委員会」の設立（2002 年）と、その中の 1 グループである「匠の町しもすわ・あきないプロジェクト」の活動である。同プロジェクトは町民の協力の下で 2003 年に空き店舗を自力で改装して「匠ぶらっと SHOP」をオープンした。事務所のほか地元作家のクラフト作品等を展示販売する場として活用されている（営業時間は午後 1 時から午後 5 時まで、日曜定休）。

「匠の町しもすわ・あきないプロジェクト」は空き店舗の活用や手づくり看板の製作、歴史的建造物である繭保管庫を活用した「匠ぶらっと SHOPS」（工房や店舗を配置したクラフトフ



「東洋のスイス」下諏訪町

2007 年 4 月撮影（以下同じ）



「匠ぶらっとショップ」

エア)の開催などを行っているが、「歩く」という観点で興味深いのが「ぶらりしもすわ・三角八丁」である。「三角八丁」は大灯籠、諏訪大社下社春宮、同秋宮の3点を結んだまちの中心部を指す。この狭いエリアに様々な時代の建築と商業、工業などの様々な産業が集積しているが、他のまちの中心部と同様、近年では衰退傾向が見られる。そこで、町産業観光課、商工会議所等の関係機関が一体となって地区振興のために毎年数回開催してきているイベントが「ぶらりしもすわ・三角八丁」である。

2007年4月30日にはその第8回が開催され、毎回人気のスタンプラリーが実施された。これは、地区内にある「儀象堂」(時の科学館)、「奏鳴館」(オルゴール博物館)などの施設の中から6箇所回ると抽選でプレゼントがもらえるというものである。イベント当日は御田町のおかみさん手づくりのぼた餅などが振る舞われる「春のおもてなし」や「抹茶の振る舞い」、「うんめ~もの広場」、「お菓子の屋台」などが実施され、まち総出でイベントを盛り上げている。

なお、地区内には古い建物を指定した「街かど博物館」がいくつかあるが、年々減少する傾向にあり、先に触れた繭保管庫も既に取り壊されてスーパーマーケットになっている。

三角八丁の地区には緑豊かな路地やせせらぎのある小径などがいくつもあり、イベント開催時でなくとも歩く楽しみがある。大門通りなどにも魅力的なせせらぎがあるので、歩行者が自動車を気にせずリラックスして回遊できる環境を整えば、地区の魅力は一層増すものと思われる。産業、まち、自然が調和する風景は、下諏訪町で開催されているインダストリアルツーリズムの魅力をも一層高めるに違いない。



諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴館」



大門通り

#### - 4 - 2 歩いて文化を感じるまち 愛知県瀬戸市

名古屋駅から東へ地下鉄東山線、名鉄瀬戸線と乗り継いで約 50 分で到着するのが「せとものまち」として有名な瀬戸市である。この瀬戸市ではまちを「せと・まるっとミュージアム」としてアピールしている。「まるっと」とは「まるごと」を意味するこの地方の言葉であるが、「まるごと博物館」というのは近年各地で採用されてきているまちづくりの手法である。そしてそのルーツは 1960 年代のフランスで始まった「エコミュージアム」にある。

エコミュージアムは、当時のフランスにおける中央集権排除・地方文化見直しの気運の高まりを背景に、地方の生活そのものを博物館に見立てるものとして開始された。その特徴は、建物内部の閉ざされた空間ではなくまちそのものを博物館とする、モノばかりでなくまちの歴史・文化そのものを観る対象とする、住民が中心となって案内する、といったところにある。すなわち、特定の施設でなくまち全体を見る。見えないものを大切にする。行政ではなく住民が中心になる。まちづくりの参考になる。

エコミュージアムは一般的にコア（中核施設＝情報・研究施設等）サテライト（まちなりわいなどを展示する場）およびそれらを結ぶトレイル（小径）から成る。「せと・まるっとミュージアム」ではそれらが巧みに配されている。

まちの西部に位置する尾張瀬戸駅を東に向かって出ると、右手には瀬戸川の美しい流れが見える。そして、その前にそびえる太い柱には、「パルティセと観光案内所 ただ今、ご案内中」「30m左 左」と書かれており、左向きの矢印が描かれているので、足はそちらに向かうことになる。この「パルティセと」は市街地再開発事業で整備され 2005 年 2 月にオープンした建物である。市民中心のワーキンググループの議論により、容積が抑制された建物となっている。

「観光案内所」は「パルティセと」1 階ロビーの片隅に小さなコーナーとしてあり、そこでは地元の年配の女性が 2 人で案内してくれる。事務的なところがなく、地元言葉を交えながら



瀬戸川 2007 年 4 月撮影（以下同じ）



「パルティセと」

この左側に駅、写真左下は駅前に立つ柱

世間話をするという雰囲気もあり、ここ自体がすでに「まるっとミュージアム」の一部であることを実感する。ちなみに「パルティセと」の1・2階にはカフェなどの店舗のほか図書返却ポストや市民サービスセンターがあり、また、3・4・5階には市民活動センター、児童相談室、ライブラリー、大学コンソーシアムせと、会議室、フィットネスジム、店舗などがある。空き店舗対策など様々な事業を展開している「瀬戸まちづくり株式会社」もここに入っている。

この「パルティセと」をコアとしてその周辺には様々な見どころが用意されている。近くには「瀬戸蔵ミュージアム」、「瀬戸蔵セラミックプラザ」、「瀬戸市新世紀工芸館」、「無風庵」などがあり、少し足をのばすところには「窯垣の小径資料館」、「品野陶磁器センター」、「赤津焼会館」などがある。そしてそれらを結ぶトレイルとして「暮らしっくストリート」、「窯垣の小窯道具で作った塀や壁などに会い、歩くだけ径」、「洞街道」、「小狭間坂」など歩いて気持ちのよい小径が整備されている。それらを辿ると

で瀬戸のまちの文化を自然に感じるができる。

駅から程近いところにある銀座通商店街には、商店街若手有志が空き店舗を活用して運営する「お休み処茶屋」がある（「瀬戸まちづくり株式会社」が企画に参加）。また、その隣の空き店舗を活用して名古屋学院大学の学生が運営する「マイルポスト」(カフェ、学生の店、ミニFM局等)が設けられた。人の交流を促進しておおいに盛り上がり、まちづくりの成功例となったが、大学の一部が名古屋に移転することになったことから2007年3月4日に閉店した。目下、商店街、大学、行政、商工会議所、TMO、地域NPOから成るプラットフォーム(支援組織)で新しい事業主体を検討中である。



街角ギャラリー（せと・まるっとミュージアム No.86）の窯垣



銀座通商店街の旧「マイルポスト」(右)と「銀座茶屋」(左)(写真はたまたま商店街の定休日に撮影)

### - 4 - 3 歩いて人を感じるまち 愛知県碧南市（大浜地区）

名古屋から列車で南下することおよそ 50 分で名鉄三河線の終点、碧南駅に着く。そこに碧南市大浜地区のまちが広がる。大浜漁港を擁する海のまちであるが、南北朝以来の歴史を持つ寺社のまちでもあり、魅力的な路地が多数存在している。

その大浜地区は 2000 年に「歩いて暮らせる街づくりモデル地区」に選ばれ、以来、地域住民中心の「大浜地区歩いて暮らせる街づくり推進委員会」でまちづくりのコンセプト等が話し合われてきた。そして計画が策定され街路や水辺空間などの整備が行われることとなったが、特徴的なのは 2000 年から毎年秋に開催されている「大浜寺町ウォーキング」である。これは要するに大浜地区を歩いて楽しむイベントであるが、その際にまちの人々がいろいろなおもてなしをしたり、専門家がレクチャーをしたり、展示会等があったりする。

第 1 回のイベントでは開催側は 3,000 人程度の参加者を見込んでいたというが、実際には 1 万 5 千人もの人が集まった。第 2 回目は 2 万

5 千人とさらに増え、以後、今日まで続く大人気イベントになっている。2006 年は 10 月 15 日（日）に開催され、切り絵展、五平もち販売、ギター弾き語り（昭和の流行歌）、お抹茶の呈茶、矢作川でとれたシジミ汁無料接待、ガン封じ御神酒接待などがあわせて行われた。2007 年度も 10 月 21 日（日）に開催されることが決まっている。主催は「大浜地区歩いて暮らせる街づくり推進委員会」、後援は県、市、碧南商工会議所、市観光協会である。

「大浜寺町ウォーキング」の趣旨はまちを気ままに散策して自由に楽しむというところにあるので、その楽しみはイベント開催期間以外でも味わうことができる。そして、その拠点となるのが大浜地区の商店街振興組合が運営する「大浜まちかどサロン」である（パチンコ店跡に開館したものであるらしい）。

「大浜まちかどサロン」の内部は広々としたロビーにテーブル、イスが配置されて多くの人が休憩できる場所になっている。会議室も設けられ、インターネット接続サービス、無料レン



西方寺近くのまちなみ

2007 年 4 月撮影（以下同じ）



「大浜まちかどサロン」

タサイクルなどのサービスもあり、事務所には担当者が常駐している。地区の人が制作した工芸品などが展示販売されているほか、まちを知るための資料（建物紹介、民話紹介等）も豊富に揃えられており、大浜地区を知り人々が交流する場として大きな役割を果たしているようである。

その「大浜まちかどサロン」では「大浜地区歩いて暮らせる街づくり 散歩地図」を無料配布している（道が詳しく描かれ豊富なイラストも付いた豪華なカラーのイラストマップ）。一方、「大浜てらまち巡り」を100円で販売している（白黒の地味なマップ）。このマップは十ヶ寺を回ると「素敵な記念品（特製手ぬぐい）」をもらえるというスタンプラリーに用いるもので、マップの裏には各寺の説明も付いている。スタンプは寺の奥に置いてあったりするので（靴を脱いで上がらなければならない場所など）、自然と会話ができる仕組みにもなっている（留守の場合もある）。

大浜地区では寺町のまちなみのほか、大浜中

区稲荷社あたりの細い路地（昔は水路であったらしい）、味噌・味醂の産業で栄えたことを偲ばせる九重味噌大蔵、堀川や港の水辺、清澤満之記念館の新しい建築、蓮如街道など、狭い地区ながら多様な風景を楽しむことができる。このようなまちで地元の人々のもてなしがあり、専門家のレクチャーもあるのであるから、「大浜寺町ウォーキング」が盛況になるのも理解できる。



九重味噌株式会社の大蔵



蓮如街道



## - 5 緩のまち

歩いて暮らせるまちづくりのあるべき基本精神は、ものごとを実利ばかりで見ないということであろう。経済的な効率を優先するのではなく、まちに蓄積された歴史、文化、さらにはそれ以前のものとしての風土、自然をまずはしっかり守るという精神が各地のまちで回復してきているが、「歩いて暮らす」という行為はそのような精神の上に成り立つ。それは、道路は通過するという機能を満たすもの、建物は人を収容するという機能を満たすもの、という機能論からの離脱であり、道路も建物も「緩」(ゆるやか、隙間がある、弱い、ゆっくり、低密度、なだらか等)につくるという考えにつながるものである。

### - 5 - 1 自動車ではなく人をこそ 静岡県静岡市(呉服町名店街)

今川氏時代に歴史をさかのぼる呉服町のまちでは1990年代半ばに道路整備が行われた。その内容は、道路を広くまっすぐにして自動車交通の利便性を向上させるというものではなく、歩道を広く車道を狭くし、かつ車道を蛇行させて自動車を入りにくくさせるというものであった。ここに今日に見る呉服町の人間的で温かみのある空間の基礎ができあがった。自動車は、もちろんひとつの有用な道具ではあるが、宇沢弘文『自動車の社会的費用』(岩波新書、1974年)が早くから指摘していたとおり甚大な外部不経済をもたらすもので2004年)が指摘するとおり「一般の生活に伴

あり、中西準子『環境リスク学』(日本評論社、うリスクとしては、やはり自動車に伴うものが大きい」のであるから、自動車利用の抑制はその面では大きなプラスの経済効果をもたらし、人間が自然に集まる要因ともなる。しかも呉服町の場合、車道すら人間優先になっている。人間が車道を歩いていると、後ろから来た自動車はクラクションなど鳴らさず歩行者の後ろで待っている。場合によっては数珠つなぎになっても静かに待っている。空間の作り方が人間を優しくするということもあるようである。

呉服町名店街の空間に心地よい緩やかさを



呉服町名店街 歩道を広く・車道を狭く



車道も歩行者優先

2007年3月撮影(以下同じ)

感じるのは、自動車が極めてゆっくりと走っているからであるが、石畳や植栽、様々なモニュメントの配置が空間の固さを和らげているからでもある。呉服町名店街はハード面で人間を大切にした上質空間になっており、日夜を問わず賑わう場所となっている。

一方、ハードだけでは商店街に人は集まらないという基本的な考えから、「一店逸品運動」が1993年から行われてきている。そのPRの仕方も巧みであり、例えば地元の静岡新聞などには広告特集として「保存版 逸品カタログ」を折り込みチラシとして入れたりしている。また、逸品は固定的なものではなく、商店街の委員会での議論などを通じて常により上が目指されている。メンバーとなる店については、地元の店だけではなくチェーン店なども柔軟に加えている。例えば2007年3月16日付けのチラシの「新店・紹介」にはドトールコーヒーショップやサブウェイ、マクドナルドなども含まれている。

以上のほか、呉服町名店街には賑わいを創出するための様々な工夫がある。例えば、交

流施設の設置（市子育てセンター、NPO活動センター、市民ギャラリー、多目的ホール）、買い物客に対する駿府浪漫バス乗車券の配布、つい持ちたくなる優れたデザインのエコバックの開発等が行われてきている。

一方、地区としての経営の一体化も進められている。その仕組みとして「ランドオーナー会議」を設け、2~3ヶ月に1回程度開催している（研修、視察、懇談等）。その基本的な考えは、ランドオーナー（地主）には運命共同体の一員として街に関心を持ってもらい、街の発展を支えてもらう必要があるというものである。不動産所有者は、その所有形態の如何を問わず、街に責任を持たず自己の利回りだけに関心を持つことがあってはならないということであろう。

最後に自動車の話に戻ると、脱自動車社会化は、それがまちのリスクを大きく低減し、賑わいをもたらすのであれば、極めて優れた「経済政策」「福祉政策」であり、日本の経済、社会を回復させるための最重要課題のひとつとなる。



国際交流モニュメントとモニュメントベンチ



一店逸品のフラッグ

## - 5 - 2 足るを知るまちづくり 静岡県掛川市

JR 掛川駅北口の改札を出て振り向けば、そこには昔懐かしい木造の駅舎がある。新幹線が止まる駅では唯一の木造駅舎であるらしいが、これは新幹線駅設置工事の際に東海道線のみの時代の駅舎を保存して利用したものである。このように歴史を大切に作る精神が掛川市のまちづくりのひとつの基調をなしている。そして、現在はこの掛川駅をも通る「緑の回廊」を整備する「緑の精神回廊都市」が掛川市のまちづくりの基本方針になっている。

「緑の精神回廊」は「防災と美観の公共空間を兼ね備えた緑あふれる歩道のネットワーク」であり、それは 防災空間、 ふれあい空間、 洗心空間、 美観学習空間という4つの役割を担っている。「洗心空間」という言い回しは他のまちの計画ではなかなか見られないユニークなものであるが、それに関しては「自然との共生・思索・哲学の空間づくり」と説明されている。また、「緑の精神回廊」は“楽しく歩くこと”が基本であり、思索しつつ歩くことや議論しながら歩くことにより、その魅力はさら

に高まります」との説明もあるので、考えること、学ぶことが施策の底流にあることが理解できる。日本ではじめて「生涯学習都市宣言」を行ったいかにも掛川市らしい発想である。

「緑の精神回廊」はいくつかの回廊から成るが、一番大きな回廊は駅の北方を東西に流れる逆川を2つの輪の接線とする「8の字回廊」である。その「8の字」の下の輪の右側に沿って駅から逆川に向かう御幸通りでは、区画整理にあわせて住民発意の「城下町風まちづくり地区計画」が決定され、市の補助の下で城下町にふさわしい風格あるまちなみが整備された。地区計画の内容は公道から1m以上のセットバックを行う、地上4階以下とする、屋根部分のデザインに配慮する、道路面の屋根は黒瓦葺仕上げとする、外壁の色彩は白・黒と自然素材色を基調とする、基礎は一貫性を考慮し自然石（白御影石）とする、屋上広告塔は禁止する、等となっている。

逆川を渡って「8の字」の北の輪に入ると、1994年に戦後初の本格木造建築として再建さ



掛川駅北口駅舎

2007年3月撮影（以下同じ）



城下町風のまちなみ

れた掛川城を中心としたエリアになる。城の周囲には大手門、市立中央図書館、大日本報徳社、二の丸美術館、二の丸茶室などが修復、再建あるいは新設されている。城の北東には「竹の丸」と呼ばれる築 100 年の木造建築があり、現在は歴史資産として市の所有になっているが、老朽化が著しいため 2007 年 8 月に修復工事が開始されている。2009 年 2 月末完成予定で、完成後はまちづくり活動の拠点として活用されることになっている。

「8 の字」の北の円を一周して逆川に戻ると、そこでは架橋工事や遊歩道整備が行われている。この逆川は緑の精神回廊の中でも貴重な水辺空間であり、市が 2002 年 2 月に「スローライフシティー宣言」を行って以来設けられてきた「スローライフ月間」の際のイベント空間ともなってきた。「スローライフ月間」は 2002 年から 2005 年まで設けられ、市民提案の様々なイベントが行われてきたが、取り組みの継続性を確保するため 2004 年 7 月に「NPO 法人スローライフ掛川」が設立され、2006 年からは同

NPO が通年で「掛川ライフスタイルデザインカレッジ」を開催している。このカレッジのプログラムは「ベーシックプログラム」と「アクティビティプログラム」とから成り、前者はフォーラム、フェスティバル、セッションにより構成されるが、後者はカヤッキング、フライフィッシング、オーガニックファーミング、サイクリング等、直に自然に触れる内容となっている。これらをきちんと両輪に位置づけることで真のまちづくりがわかるというのが基本的な考えであり、また、地球環境問題に直面している今、自然に直接触れることでしか価値観は変えられないとの理念もある。同 NPO のホームページではカレッジが次のように説明されている。「知識を知恵に、そして行動に。自分の生活や地域をクリアに見直したい人に。地域の楽しい生活・面白い生活・粋な生活をテーマとして、「まちの新しい使い方」「足るを知る心」「美しい毎日の創造」を探求し、実践する、大人のための生活提案講座です」。



竹の丸



逆川

### - 5 - 3 生業がある町家の賑わい 愛媛県伊予市

JR 伊予市駅を降りると、港に向かって右手に町家がまとまって建っているのが目に入る。それらの町家は広々とした中庭（「公園広場」）を抱えるようにして建つ低層の店舗等であり、伊予市第3セクター「株式会社まちづくり郡中」が運営している。平日昼間の人出はあまり多くなさそうだが、週末などは大変な賑わいになるそうである。同社によれば特産品売り場のレジ通過者数は2006年度に19万人を突破し、それは前年度比で18パーセントもの増加であった。また、松山市からの来客が26パーセントも占めており、まちの外から大勢の人を集めていることがわかる。この「町家」と呼ばれる施設は、市の中心市街地活性化策の目玉として2004年4月にオープンしたものである。

市は活性化策を練るにあたり、2000年に市民アンケートを実施した。その結果、中心市街地のあるべき方向としては「市の顔になる地区」が73パーセントと最も多く、行ってみたい店や場所としては「生鮮品が並んだ市場」が51.1パーセントと最も多かった。この結果を踏

まえつつ市民ワーキングなども行い、2000年に策定した中心市街地活性化基本計画で拠点のひとつとして駅前を「街の交流拠点」にし、「町家」を公設民営方式で整備することとした。そして2001年に「まちづくり郡中」を設立した。

ここで注目されるのが「町家」の建築形態である。案としては 一体的建物新設、 一体的建物分散配置、 既存建物活用分散配置、の3つがあったが、 が選択されることとなった。それは、いろいろな面で問題を緩和でき、また緩やかなまちづくりができるからである。具体的には、 建設費用抑制、 店舗入替え円滑化、 歩行者通り抜け可による店舗条件差緩和、 建築デザイン、 通路、 広場の魅力アップ、 街並みの連続性確保、が見込まれた。

「町家」はインキュベータ機能も持たせるものであったため、費用の抑制や店舗内容の流動性確保、店舗立地条件の均一化、街との連続性確保は重要な要件であった。また、まちづくりの拠点としてイベント等を頻繁に開催する場



JR 伊予市駅側から見た町家 2006年2月撮影



公園広場側から見た町家



町家の配置図（駅は右側）

A 特産品・鮮魚販売所 B 店舗 C トイレ  
D1階 インフォメーションセンター 2階 事務所

ともなることから、その場を大きな建物の中に閉じ込めてしまうことは街とのつながりを希薄にするということで望ましくなかった。さらに、「町家」を拠点にして人々にそこから町の中を回遊してもらう面でも外に開いたカタチが望ましかった。「既存建物活用分散配置」が選択された背景にはこのような判断があったと考えられる。

そして2004年4月にオープンした結果、前述のように大盛況となったわけである。チャレンジショップという性格があるため店舗には入れ替えがあったり空き家状態がしばらく続いたりするものもあるが、特産品・鮮魚販売所が大勢の人をひきつけていることから、その波及効果の恩恵を少なからず受けているものと思われる。チャレンジショップと特産品売り場とのこのような組み合わせは他のまちでも大いに参考になるものであろう。

「町家」を実際に訪れてみれば、広場側が閑散としている時間帯でも特産品売り場は比較的活気がある。そして、その場も含め「町家」

は単なる販売所ではなく地元の人々の交流の場ともなっているようであり、また、外部から来た人をもてなす場ともなっているようである。例えば特産品販売所でうろうろしていると、声をかけられて地元で採れた柑橘類を幾つも手渡してもらえないことはない。このようなおらかさは大都市にはない地方のまちの大きな魅力である。大都市でうろうろしていて声をかけられてしまう状況とは正反対の状況である。

なお、問題は「町家」から町への回遊が少なそうなことである。「まちづくり郡中」も「町家から郡中の街へと人の流れができることを願っています」とホームページに掲げている。町の中には魅力的な建築が数多く残されており、これらを活かすことが課題として認識されているようである。



宮内小三郎邸（灘町）



山惣（やまそう）商店（湊町）